

＜前期終了時点順位表＞

	チーム名	勝	負	分	得	失	差	勝点
1	駒澤大学	6	0	1	18	9	+9	19
2	国士館大学	5	1	1	12	6	+6	16
3	筑波大学	5	2	0	18	10	+8	15
4	東京学芸大学	3	2	2	8	7	+1	11
5	亜細亜大学	3	3	1	8	14	-6	10
6	中央大学	1	5	1	4	10	-6	4
7	順天堂大学	1	6	0	8	14	-6	3
8	日本大学	0	5	2	3	9	-6	2

★得点ランキング★

7ゴール	鈴木孝明(筑波大)
6ゴール	赤嶺真吾(駒大)
5ゴール	岩田耕併(亜大)
4ゴール	山崎雅人(国士大)
	原 一樹(駒大)
	町田多聞(筑波大)

★アシストランキング★

5アシスト	養父雅仁(国士大)
4アシスト	兵働昭弘(筑波大)
	藤本淳吾(筑波大)
3アシスト	松浦 淳(東学大)
	中後雅喜(駒大)
	中田洋介(駒大)
	他1名

駒大・前期の成績

- ◆第一節 (日本大学戦) △1-1 【得】赤嶺
- ◆第二節 (中央大学戦) ○1-0 【得】中田
- ◆第三節 (順天堂大学戦) ○3-2 【得】赤嶺、巻、原
- ◆第二節 (亜細亜大学戦) ○2-1 【得】赤嶺、関
- ◆第一節 (国士館大学戦) ○2-1 【得】原、巻
- ◆第二節 (東京学芸大学戦) ○3-0 【得】原、中田、橋本
- ◆第一節 (筑波大学戦) ○6-4 【得】橋本、赤嶺3、巻、原

前半戦トピック

①新戦力の台頭

前期首位ターンをした原動力として新戦力の活躍は見逃せない。原、巻の活躍も衝撃的だったが筑城、廣井も一年生ながらその能力の高さでチームに貢献。原はリーグ戦での活躍が認められユニバーシアード代表候補にも選ばれた！

②チーム内ランキング

前期チーム内の得点王は赤嶺。6得点と原、巻の活躍に負けまいと奮闘した。アシストは昨年のアシスト王・中後と中田。ちなみにイエローカードが一番もらっているのは筑城の4枚。



チームで最多の得点を決めた赤嶺。エースの階段を着実にのぼっている

③3戦連続の逆転勝利！

今年のチームは本当に勝負強かった。それを物語るのが3節～5節にかけてみせた連続逆転勝利。特に3節の順大戦は残り4分で逆転されたものの、すぐさま同点にしたのちにロスタイム決勝弾を叩き込んだ。この試合で負けない駒大を印象付けた。

④負けない駒大

深井正樹、巻誠一郎が抜けた今シーズン。まわりからは戦力ダウンが囁かれたが苦しい試合をことごとくものにし首位ターン(6勝1分)を果たした駒大。特に終盤の3連戦を全勝したのはおきかった。勝負強さと言うものが今年のチームからは感じられる。唯一の引き分けは開幕戦の日大戦。開幕戦の難しさを物語る数字である。

⑤チーム総合ランキング

チーム単位でいろいろなものを検証してみると一番得点を取っているのは駒大と筑波大(18点)。守備が一番安定していたのは東学大(7点)。しかし、駒大はその東学大から3得点を奪っている。今年も大学ナンバー1攻撃陣は駒大？



順大戦の逆転劇はチームを完全に勢いに乗せた。巻、原にもこのとき初ゴールが飛び出した



中田(右)など4年生はやはり勝負どころを知っている。その活躍があってこそ首位ターン

上位陣との直接対決も3戦全勝！

いよいよ前期リーグ戦山場の上位チームとの直接対決3連戦に突入。その初戦となる第5節、相手は昨年のインカレで駒大の大学3冠を阻んだことで、3ポイント差をリードしていた。3戦連続の逆転勝利をおさめた。

つたーと試合後、監督は語ったがこの策がズバリの中。中後の投入により中盤が活性化された駒大はさらに亜大ゴールを攻め立てた。そして迎えた84分、こちらも途中交代の関が決勝ゴールを叩き込みベンチの勇断が光った試合は駒大が苦しみながらも勝利した。

駒大だったが、残り時間もあつたし、前節も逆転で勝っていたので焦りはなかった(中田)と選手達には焦りはなかった。57分、66分と原、巻のゴールでリードを奪うと、その後も駒大は国士大を圧倒。攻撃的サッカーが機能し、3戦連続の逆転勝利をおさめた。

第6節、駒大は相性の悪いグラウンド、江戸川競技場で、昨年一度も勝てなかった相手・東学大と戦った。駒大の「負」の要素が危惧されたこの試合だが、後半にその不安は一掃される。47分に原、78分には中田がそれぞれ87分には橋本のため押しゴールが決まり終わってみれば駒大の快勝。ここまでリーグ最少失点を誇る東学相手に3得点と攻撃陣が大爆発した。リンクスなどど吹く風。最高の形で5連勝を果たし、首位へと浮上した。

そして前期最終節、昨年最後まで優勝を争った筑波大との試合は、激しい点の取り合いとなった。駒大は橋本の直接FKで先制する。幸先の良いスタートだと思われたがこれはこれから始まるゴールラッシュの幕開けでしかなかった。直後にあつさりと同点に追いつかれてしまうもののその後徐々にスタメンに復帰した赤嶺が意地の2得点を決め2点のリードで前半を折り返す。後半の開始早々に1点を返された駒大だったが、その直後赤嶺がこの日自身のハットトリック

ここから52分、66分と筑波大に得点を許し、まさかの同点とされてしまう。この嫌な流れを断ち切ったのはまたしても一年生2トップだった。巻のゴールで再度リードを奪うと、85分に原が相手の息の根を止める6点目。激しい点の取り合いを制した駒大は去年同様首位で前期リーグ戦を終えた。

最強チームへ進化を続ける駒大

6勝1分けという成績だけを見れば素晴らしい成績である。昨年の首位ターンの時点で5勝2敗という成績を見ればその凄さがわかる。しかし、楽観視は出来ない。2位の国士大とは勝ち点3差。後期何が起ころうともおかしくない数字である。そして試合内容はどの試合も紙一重ということである。新人の廣井は筑波戦後、こう語った。「どのチームも強い。紙一重で勝つてるという感じですよ」。これが前期の本音ではないだろうか？逆転勝ちがおおいのもこの事実を物語るっている。一時は上位4チームと下位4チームの間に勝ち点9もの差が開いたが下位チームと上位チームの間に実はそれほど差はない。しかし、そのなかでも駒大は着実に勝ち点を拾い続けた。攻撃陣も無限の可能性を秘め、守備陣にも安定感がでてきた。後期、どれだけ成長した駒大がピッチの上で躍動するのか今から楽しみである。(湯ノ口栄太)